

## 2. 社会学における身体論

— ジョン・オニール『語りあう身体』（1992、紀国屋書店）を読む —

藤田 和也

### 1. J. オニールのプロフィール

本書は、原書 John O'Neill “Five Bodies, The Human Shape of Modern Society” を須田朗（中央大学文学部哲学科教授）が訳出したものである。奥付と解説から著者 J.オニールのプロフィールを紹介すると。

訳書の出版当初、カナダ・ヨーク大学の社会学の教授である。イギリスのロンドンスクールを卒業後、アメリカのノートルダム大学とスタンフォード大学の両大学院で政治学と社会思想史を学ぶ。原書は彼が1972～82年にかけて、カナダ、ヨーロッパ、アメリカのいくつかの大学で講じたものをもとにまとめられたもので、出版は1985年である。

日本では、本書のほか、『言語・身体・社会』（1985）、『メルロ・ポンティと人間科学』（1986）などが訳書として出されている。

奥田和彦（国際大学）の「解説」および「訳者あとがき」では、オニールの「身体社会学」と本書の特徴について次のように述べられている。

「オニールの『身体社会学』の出発点は、フランスの哲学者、メルロ・ポンティの『知覚の現象学』であった。また彼は英国で生まれ教育も受けたこともあつてか、ヨーロッパの学問的伝統を継承しながらそこでの対話も怠らない。したがって本書でも、マルクス、フロイト、デュルケム、レヴィ・ストロース、ハーバーマス、フーコーなどの名が散見されるのも、その事と無縁ではない。その中でもヴィーコの『新しい学』が本書に与えた影響は大きい。」（奥田）

「メルロ・ポンティの研究者であり英訳者でもあるオニール氏は本書で、現代社会と現代文明のなかで失われて行く人間性を回復すべく、社会生活の本来の基盤である血肉化した相互主観性、間身体的なコミュニケーションへわれわれが今一度

立ち帰ることの必要を力説している。世界、社会、政治、経済、医療の各次元で、生きられた身体に根ざしたコミュニケーションを復権しようとしている。」（須田）

### 2. 本書の構成

本書の構成は次のとおりである。

#### 序論 われわれの二つの身体

「擬人化」という方法視点の提示、物理的（自然的）身体とコミュニケーションの身体との区別、コミュニケーションの身体という概念装置の提示

#### 第一章 世界の身体 The World's Body

世界の身体化による（世界を擬人化してとらえる）認識方法の検討

#### 第二章 社会的身体 Social Bodies

社会の秩序維持や個人と社会との関係が身体の社会化によって支えられていることを考察

#### 第三章 ボディ・ポリティック The Body Politic

ボディ・ポリティックの本来の意味（古典的概念＝政治体）を検討し、国家による脱家族化を批判的に検討

#### 第四章 消費者身体 Consumer Bodies

消費経済過程における身体（欲求）や身体メタファーの解明

#### 第五章 医療化された身体 Medical Bodies

医療のテクノクラート・官僚主義化、医療による身体の産業化・脱家族化を指摘

#### 結論 人類の未来の形態

人間性の回復のために徹底した擬人化・身体化の必要を説く

#### 付論 地球化するパニックとしてのエイズ

エイズ教育が治療国家化した社会の言説領域に入ってきていることを説く

## 解説 治療国家とボディ・ポリティック

オニールの指導を受けたことのある奥田和彦氏の解説

### 3. 内容の要旨

序論では、人間の知識の進歩は、「人間に集束するような世界観を放棄するよう要求して」おり、今では「人間の制度に人間的な形を与える力を失ってしまった」と断じ、「主観的科学の行きすぎと主観なき科学の行きすぎの双方からひとしく身を守」りつつ、「社会科学における擬人化的なパースペクティブ」を提示するために、「人間と自然と社会制度との複雑な関係」について人間の身体からアプローチする、という本書のねらいと方法を述べる。次いで、身体には「物理的＝自然的身体」に加えて、われわれの世界の、あるいはその歴史・文化・政治経済の普遍的媒体となる「コミュニケーション的身体」があるとし、このコミュニケーション的身体でもって人間社会の諸制度をとらえ直すことが本書の課題であるとする。さらに著者は次のように付言する。「社会学者が身体から切り離された人間を研究する傾向があり、定量データとか面接調査票を使って研究する方を好む、・・・ところが面接調査や意見調査を通すことによって、身体をもった被験者はきれいに羽をむしりとられてしまう」と。

第一章では、著者は、「かつて人々は自分の身体を通して宇宙を考え、宇宙を通して自分の身体を考えることができた」とし、擬人化による世界認識の方法を復活する必要を説く。西アフリカのドゴン族やファリ族の世界観が擬人的で、あらゆる物の部位と機能は、身体の部位や機能や関係からの類推によって理解されていることをあげながら、擬人化的思考は歴史的連続性をもっているから、これを「われわれ人間性にとって本質的なひとつの普遍的思考形態として保存して一向にさしかえない」と著者はいい、「科学の地盤は世界の身体である」と説く。ところが近代科学以降は世界の身体は人間から遠のいた。ベーコンとロッ

クは、身体をその五官に還元し、人間の目と精神はたんに経験的世界の鏡でしかないことになったことを嘆き、近代科学以前に存在した創造的な身体をもう一度蘇らせる必要を熱っぽく説く。そして、「われわれが過去にもっていた自己形成の創造力を思い起すことによって世界、自然、人間家族の未来の形態を、考えることができるようになることが」本書のねらいであるという。

第二章の「社会的身体」では、人類社会では身体化された論理によって社会秩序が維持されていることを、ローベル・エルツの右手の研究、メアリー・ダグラスの身体的汚れに関する研究などを引きながら考察が展開される。一般に人々は右手を偏愛し、右手にあらゆる種類の特権を与えながら、他方で左手を無視し、忌避する（右手で折り、誓いを立て、新鮮な右手で食物を口に運ぶ。右手で握手し、右手で左手に指輪をはめる、等々）。また、身体的な汚れを避けたり、とり除いたりするための行動様式も多様に存在する。われわれは汚れを避けそれを視界から遠ざけようとする。そして多くは肉体的な理由というよりもむしろ道徳的なものである。メアリー・ダグラスによれば、「汚物とは場違いなもの」であり、体系的秩序を乱すものである。考察はさらに食べることと食文化に及び、食事の規則と禁忌もまた、その社会の秩序維持およびその集団と部外者との区別、そして自分たちのアイデンティティの保持に役立っているものであるとする。

第三章はボディ・ポリティック（国家）である。ボディ・ポリティックという比喩的表現が、古代および中世期を通じて政治共同体の秩序維持（差異のなかの統一）を解く場合にたびたび用いられてきたことに触れながら（例えば、国家を身体になぞらえて身体各部の必要性和有機的な一体性を説くローマ時代の言説、中世中期の政治神学が説いた「王の二つの身体（Body Natural と Body Politic）」、キリストの自然的身体と教会的身体など）、このレトリカルな概念が官僚的な政治学

にかかわるレトリックとは異なり、市民的民主政治のコミュニケーション能力をかなりの程度にまで高めることができると説く。そして、今日支配的な科学的・官僚政治的な知識を、個人と家族がもつ良識的な生命知のなかにもう一度埋め込むことができると著者はいう。

さらに著者は、現代の管理国家におけるボディ・ポリティックの分析に及ぶ。管理的で組織的な科学を支配してきたボディ・ポリティックを次の三つのレベルのモデルでとらえる。第一のレベルは政治的な生命-身体。これは生命の安全、身体的健康、生殖に関する男女の関心を表現する方式であり、対応する制度は家族である。第二のレベルは生産的身体。これは生活の物質的・社会的生産のために必要な、労働と知性の複雑な組織化であり、対応する制度は仕事である。三つ目のレベルはリビドー（欲望）的身体。個人の欲望が家族や経済機構（労働）の財では満たされず、個人の生活秩序を実現する欲望のレベルであり、対応する制度は個人生活である。これら三つのレベルの秩序は互いに分離できない諸世界をなし、他方に還元されることはない。

リビドー的身体・ポリティックは企業文化の創造物であって、「企業文化が称える若い、白人の、ハンサムで、異性愛的な人々の〈健康と富の世界〉のことである。」その意味で、リビドー的身体・ポリティックは、共同体が貧者や病人や老人や醜人や黒人の問題に対処しそこねていることを認めることなく、〈郊外でくらす〉というイメージに合わないものは、人種・貧困・犯罪・精神病のゲッターへ押しやられる。さらに筆者は、今日の「ネオ個人主義と国家主義という行き過ぎた対概念を矯正」するために、家族に基づく政治を守る次のような命題を提示する。

- (1) 人間存在は家族のなかで人間的になる。
- (2) 人間的な家族はあらゆる市民的・政治的生活の基礎である。
- (3) 人間的家族は知性・共通感覚（常識）・愛・正義の最初の揺籃である。
- (4) 政治的家族主義は部族主義を再び採用するの

ではなく、むしろわれわれの公共生活と私的生活との分裂を再び政治問題化するのである。

- (5) 母性主義とフェミニズムは、本来は国家に対する家族の防衛である。
- (6) それぞれの家族は、他のすべての人間的家族のおかげで子孫に対する権利をもつことができる。
- (7) すべての家族は人間的家族というものの不可侵性と神聖性の証人である。

こうして著者は家族の再建はわれわれの公共生活を強化するためになくしてはならないものであるとし、国家の強化に對置して家族の復権を提起する。

第四章の「消費者身体」では、消費過程における身体問題を身体的欲求とその満足追求としての消費、欲望と生産・富の追求などの考察をはじめ、消費経済の身体メタファー、家事という消費労働の問題、広告における生産的身体などを検討している。まず、身体的満足追求と生産・経済の関係を次のようにとらえる。経済はわれわれのあらゆる欲求を満たしてくれそうでありながらも、われわれに奉仕するよりもむしろわれわれを奴隷にする。われわれの経済は、あたかも悪魔によって支配されているかのようである。それでは身体的欲求を越えるような消費の魔力は何によって生じるのか。生産が消費をおおるという側面もあるが、欲求がどんな社会においても大部分文化的な獲得物であることからすれば、消費の悪魔は自然的欲求よりも文化的・社会的欲求に潜んでいるとみるべきである。「富の追求がなぜ貪欲な本性をもつかと言えば、自然的な欲求を満足させる機能をそれがもつからというよりは、社会的な名声への貪欲な欲求の追求にそれが適合するからなのである」と著者はいう。

こうして著者は、〈生活の経済〉と〈名声の経済〉との区別と考察に入る。自動車は身体を運ぶだけでなく、個人的イデオロギー（名声）をも乗せて走るステイタスシンボルとなっている。現代経済は、個々人のあらゆる肉体的・精神的・情緒

的欲求を化学薬品や職業的なサービスとして物象化される。そして経済が身体をその自然な状態において評価せずに、優美さとか活気とか自信とか新鮮さとかで評価することによって身体の搾取を生み出す。運動不足化した現代の生活（これには一定の神話がはたらいているのだが）において、経済は肉体的活動をレクリエーションやフィットネスやスポーツとして売る。

さらに、消費者身体論は広告における生産的身体の分析に入る。たばこの広告（素敵な女性が登場するウィンストン社の広告、カウボーイの男性が登場するマール・ポロの広告）は、タバコの害という身体の危険をかき消して、広告に表現されている身体メタファー（自信、成功、確信など）を提供する。この広告の分析は、商品が社会制度へのコミットメントを表象していることへの理解をも可能にする。われわれは商品として手に入れた身の回りのあらゆる生活用品を直接・間接に使用することによってさまざまな社会制度にコミットしている。こうして現代の家族は次第に脱身体化され、そうすることで脱精神化されていく。機械が多く設置されればされるほど家族生活の身体化されたしきたりに対する愛着を希薄化させていく。

第五章では現代の医療化した社会の意味を問う。著者は、ボディ・ポリティックが現代の政治・経済の生産、消費、管理過程において果たす機能は、「身体の医療化においてその極に達する」という。医療が見せかけの無階級性、あからさまな専門主義精神、無神論ヒューマニズムは、いまやわれわれの基本的イデオロギーとなっている。現代医療はこのうえなくテクノクラートのであり、かつ官僚主義的である。こうした医療上の官僚制がもたらす結果をヴィンセント・ナヴァーロの次の言を引いて指摘する。

「最近の 10 年間のうちに医療制度は健康に対する主要な脅威となった。・・・医療業務は、病気に過敏な社会を補強することによって、病気のスポンサーになっている。・・・彼らは、苦痛や病気や死を個人の課題から科学技術上の仕方でも

分たちの健康状態を処理する潜在的能力を人々から没収する。」

身体の医療化はそのまま身体の産業化を意味する。それは、ライフサイクルのあらゆる段階（妊娠、誕生、養育、性行為、病気、苦痛、老化、死亡）を社会化し、官僚的な専門的ケア・センターの管理にゆだねるよう教育されるが、これらのセンターこそ身体の脱家族化をもたらす。そして、この過程の究極の目標は、生活の発生と消滅を国家の治療的管理にゆだねることによってあらゆる生活を市場に持ち込むことである、と著者は喝破する。そして、「われわれがもっているほど多くの医療をわれわれは必要としているのか、われわれはだれのためにそしてなんのために医療をもつのか」を問う必要を説く。

さらに著者は、医療化された身体に奉仕するバイオテクノロジーは、治療的支配体制の機関と化し、従来のどんな社会的・政治的支配形態よりも強かにボディ・ポリティックを掌握することになることをフーコーの政治解剖学を引きながら考察する。そして、知＝権力は、イデオロギー的には中立でありながら、われわれみずから従順な主体となって自分を支配するように操作することでわれわれを支配する、と手厳しい。

結論の「人類の未来の形態」では、これまでの五つの身体についての考察をふまえて次のように提言する。徹底した擬人化がわれわれの人間性の創造的源泉である。われわれの祖先は人間の身丈に自分を合わせ、文明化した人間の基本的諸制度——宗教や結婚や埋葬——に見合うよう彼らの身体を訓練した。後のすべての人間性は、この形而上学のおかげで存在している。われわれの人間性の失われた形態を回復させるためには、われわれの身体でもって社会と歴史をもう一度考えなおさなければならない。今日の〈脱身体化した歴史〉に、最初の人類の〈身体化した歴史〉を結合する必要を強調する。本書はそのための作業と議論であるというわけである。